

令和元年6月10日現在

機関番号：32641

研究種目：基盤研究(B) (海外学術調査)

研究期間：2015～2018

課題番号：15H05190

研究課題名(和文) “惑星社会”の問題に应答する“未発の社会運動”に関するイタリアとの比較調査研究

研究課題名(英文) Comparative research between Italy and Japan for the nascent movements that is responding to the multiple problems in the planetary society

研究代表者

新原 道信 (Niihara, Michinobu)

中央大学・文学部・教授

研究者番号：10228132

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 9,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、社会的痛苦の縮減を可能とする“生存の場としての地域社会”の構築をめざし、惑星社会の問題に应答する“未発の社会運動”を把握するための調査を行った。イタリアと日本における調査の結果、惑星社会の問題に直面する“個々人の内なる社会変動”、すなわち“生存の在り方”をめぐる根本的な「問い」とかかわる運動である場合には、それがきわめて局所的で個人的な現象であったとしても、惑星社会そのものへの重要なインパクトとなり得ることがわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本調査研究の学術的意義は、局所的で個人的な変動・運動が、惑星規模の社会のうごきにインパクトを与えるメカニズムを把握する理論・方法を錬磨したこと、国家や地域の枠組みから脱領域的・領域横断的でグローバルな協業による「水平的関係性構築」の国際共同研究ネットワークの構築、惑星規模の問題に应答するリフレキシブな調査研究のネットワークづくりの可能性を提示したことにある。社会的意義は、複合的な「危機」に直面し、異質性の否定による「壁」の増殖がすすむ現代社会において、《異質な他者が水平的な関係性を構築するかたちでのコミュニティ形成はいかにして可能か》という「問い」に応える可能性を提示したことである。

研究成果の概要(英文)：This project aimed to elaborate "Communities for Sustainable Ways of Being" that could reduce social pain(patientiae), and conducted a social research to grasp "nascent movements" responding for/to the multiple problems in the planetary society. As a result of the research in Italy and Japan, if it is a movement that includes the "changing form/metamorphosis in the interior of the individual corporeality" that faces the problem of the planetary society, that is, the fundamental "question" over "ways of being", even if it is a local and individual phenomenon, it can be an important impact on the planetary society itself.

研究分野：地域社会学、国際フィールドワーク、社会運動論

キーワード：イタリア 社会運動 惑星社会 移民・難民 社会変動 仮説生成型 リフレキシブ 潜在的局面

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

#### 1. 研究開始当初の背景

(1)本研究は、海外共同研究者メルッチが提唱する惑星社会(planetary society)論と未発の社会運動(nascent movements)論に基づき調査を行った。惑星社会論は、システム化・ネットワーク化・グローバル化の側面に注目する社会論に対して、自然や資源の有限性、極度にシステム化した社会の統治性の限界に着目する現代社会論である。未発の社会運動論は、日常生活と社会システムの間に位置する社会運動の背後にある“個々人の内なる社会変動”を把えるための理論である。

(2)惑星社会の問題に応答する未発の社会運動論が注目される契機となったのは、阪神・淡路の震災と東日本大震災である。成長の限界と「想定外」のリスクのもとで現れる複合的な問題にいかなる応答をするのか、異なるタイプの他者との相互理解、社会的痛苦の縮減を可能とする「テリトリー」としてのコミュニティをどのように構想するのかという課題に応えることを、本研究はめざした。

#### 2. 研究の目的

(1)本研究の長期目標は、社会的痛苦の縮減を可能とする“生存の場としての地域社会”の構築である。そのため、惑星社会の問題に応答する未発の社会運動を把握することが、本研究の目的となる。

(2)具体的には、1987年と2011年に国民投票を行い国内すべての原発を停止させたイタリアを、学術調査の対象地とする。経済的・政治的・社会的「危機」や「エネルギー選択」「移民・難民」問題等への関心の背後にある未発の社会運動を調査し、その特質を“リフレクシヴな調査研究”によって捉える。

(3)今回のイタリアとの比較調査研究で得られた知見と未発の社会運動論のさらなる展開と拡充により、東日本大震災以降の日本とイタリアにおける、異質性を含み混んだ“生存の場としての地域社会”を構築するための条件を探求することが本研究の意義である。

#### 3. 研究の方法

上記の目的を達成するために、以下の(1)課題、(2)アプローチ、(3)到達目標を設定した。

(1)「危機」と「エネルギー選択」への強い関心を持つイタリア、とりわけ国民投票による原発停止という可視的な社会運動が顕著に生じた特別自治州(サルデーニャ州、フリウリ＝ヴェネツィア・ジュリア州、シチリア州などの島嶼地域・国境地域)を主要なフィールドとして調査を実施する。

(2)アプローチとしては、社会運動論・臨床社会学・歴史社会学などを組み合わせた複合的アプローチによる“リフレクシヴな調査研究”(メルッチ、メルレル、ヴァルジウ)を採用する。調査で直面した困難、作業仮説の範囲をこえた事例を中心にデータを整理し、惑星社会論と未発の社会運動論による意味づけと総合を行う。

(3) 今回の学術調査を通じて蓄積した知見に基づき、プロジェクトの**往路**における基礎理論となった惑星社会論、未発の社会運動論、リフレクシヴな調査研究を錬磨する。プロジェクトの**復路**における基礎理論となる“生存の場としての地域社会論”の到達段階を日本とイタリアで公開する。

#### 4. 研究成果

本調査研究による研究成果は、(1)社会理論、(2)調査方法論、(3)惑星社会の問題の捉え直しと国際共同研究の新たな展開とにかかわって獲得された：

(1)本研究は、惑星地球規模となった現代社会で生じつつある複合的問題が、非対称性と偏差を伴って現象する地域問題への応答をめざした。惑星地球規模の規格化・画一化と表裏一体をなす都市や地域の多民族化・複合文化社会化は、社会に混沌・動揺・統治不可能性をもたらし、グローバル化のなかでかえって「壁」は増殖し、異端・異物を排除・根絶する力が、ますます強くなってきている。こうした複合的問題(the multiple problems)は、可視的な制度等に注目する**国際・社会学**あるいは**地域・社会学**、可視的な出来事を対象とする社会運動論で捉えきれなくなってきた。膨大な事例研究を基礎づける理論と方法の不十分さが指摘されており、**国際社会そのものに関する学(惑星社会論)**、シ

STEM化・グローバル化する地域社会で現に起こりつつある“うごき(nascent processes, processi nascenti)”をとらえる理論・概念・カテゴリー(未発の社会運動論)が求められている。本調査研究は、イタリア、日本社会のみならず、世界各地で生じつつある微細な“うごき”が、これからの惑星社会にもたらす意味を捉えることをめざし、“生存の場としての地域社会論”への目処を立てた。

(2)学術調査をすすめるなかで、可視的な出来事の背後の微細な動きを捉えるための調査方法論として、海外共同研究者のメルッチ夫妻(メルッチが亡くなった後は、夫人との共同研究を継続)・メルレル・ヴァルジウらとともに、“リフレクシヴな調査研究(Reflexive Research)”を錬磨した。リフレクシヴな調査研究は、初期シカゴ学派のように、living society (city, community and region)のなかで、学生・院生も含めて社会学や社会調査の理論と実践について膨大な議論を積み重ね、フィールドで出会った予想外の困難に導かれるかたちで、複数のメソッドを生み出すメソドロジーである。

仮説生成型の本調査法においては、調査者側の当初の作業仮説とは異なる理解のあり方、現象の現れ方、相関関係などに出会い、予想通りにいかない場合が、もっとも貴重なリフレクションの場を提供するかたちで設計されている。深い聴きとり調査とドキュメント収集、キーパーソンからの機縁法による学術調査をすすめるなかで、新たな知見を獲得した。すなわち、イタリアの調査対象地における当事者の危機意識、さらには精神的な病、自殺、白血病などによる死が多く現れてきたこととかかわって、可視的な資源動員や異議申し立ての背後で、“個々人の内なる社会変動”、すなわち“生存の在り方(ways of being)”そのものへの「新たな問い」が萌芽しつつあるという知見である。この微細な“うごき”が、原発停止あるいは移民排斥などへと結びついていると、当事者もまた知覚しているという知見である。それゆえ、「可視的局面」の背後で諸個人の深部で不断に醸成されている「潜在的局面」の“うごき(nascent moments)”を理解していくための調査方法論の再構成が今後の課題となった。

(3)本研究の調査対象地であったサッサリ、トリエステ等での環境・平和運動・人権運動・地域主義運動等の調査をすすめるなかで、難民・移民の問題と異質性の否定・排除の問題への応答が大きな課題として立ち現れた。「グローバル化」は、惑星地球規模で「国民」「市民」といった枠からはみ出す“受難者/受難民(homines patientes)”の存在が可視化するプロセスとなる。ここには、地方の廃棄、不採算部門の廃棄、自然の廃棄、生命の廃棄、価値・願望の廃棄、何よりも人間そのものの“廃棄(dump[ing])”の問題が内在している。“廃棄”の問題とかかわって生ずる「壁」の増殖への応答という観点から、仮説生成型の調査に基づき知見を蓄積した。

ランペドゥーザ、セウタ、メリリャ、ジブラルタル調査においては、軍時戦略上の「橋頭堡」として、基地・軍事施設が置かれてきた島嶼社会と「飛び地(国家主権の及ぶ土地)」が、アフリカからヨーロッパへの移民・難民の「玄関口」として「再発見」されたことに対する個々人の“うごき”に関する調査を行った。他方で、サッサリとトリエステ調査では、地域・コミュニティ調査研究の歩み(地域研究所FOIST/INTHUMと神奈川県・東京都郊外地区の調査研究)に関する比較、リフレクシヴな調査研究の方法論と認識論の比較(ヴァルジウたちの“コミュニティを基盤とする参与的調査研究(Community-Based Participatory Research(CBPR))”との比較)を行った。ここでは、別の研究プロジェクトで調査をすすめる宮古・石垣調査、立川・砂川調査との比較可能性が明らかとなった。

仮説生成型の学術調査の結果、“生存の場としての地域社会”は、惑星社会の問題に直面する“個々人の内なる社会変動”、すなわち“生存の在り方”をめぐる根本的な「問い」とかわる“うごき”から構想された場合には、それがきわめて局所的な現象であったとしても、惑星社会そのものへの重要なインパクトとなり得ることがわかった。他方で、特定のコミュニティの“うごき”を捉える個別の研究が、惑星社会そのものの“うごき”とどのようにつながっているのかを意味付け・比較する理論と方法の錬磨がまだ不十分であることも明らかとなった。

今後は、理論・方法を構築する方法にも自覚的なかたちで、(異質な他者が水平的な関係性を構築するかたちでのコミュニティ形成はいかにして可能か)という「問い」に即して研究をすすめる。国家や地域の枠組みから脱領域的・領域横断的でグローバルな協業による「水平的関係性構築」の国際共同研究ネットワークの構築、惑星規模の問題に応答するリフレキシヴな調査研究のネットワークづくりを、日本・イタリア・ブラジル[・カナダ・インド]の国際共同研究として行う予定である。

本調査研究期間内の研究成果は、日本とイタリアで公開され(5にて後述)、次なる国際共同研究の展開にむけての“基点/起点”としての役割を果たすものとなった。

## 5. 主な発表論文等

(雑誌論文)(計9件)

野宮大志郎、熟議民主主義と社会運動 政治のコンテキストで考える、『学術の動向』、査読無、20巻、2015、pp.80 - 84

新原道信、“受難の深みからの対話”に向かって 3.11以降の惑星社会の諸問題に応答するために(2)、『中央大学社会科学研究所年報』、査読無、19号、2015、pp.69-110

天田城介、世界の境界・裂け目から構想する方法論、『質的心理学研究』、査読無、第15号、2016、pp.221-223

新原道信、A.メルッチの“未発の社会運動”論をめぐって 3.11以降の惑星社会の諸問題への社会学的探求(3)、『中央大学文学部紀要』、査読無、26号(通巻263号)、2016、pp.113-130

新原道信、『うごきの場に居合わせる』再考 3.11以降の惑星社会の諸問題に応答するために(3)、『中央大学社会科学研究所年報』、査読無、20号、2016、pp.15-32

新原道信、A.メルレルの“社会文化的な島々”から世界をみる試み “境界領域の智”への社会学的探求(1)、『中央大学文学部紀要』、査読無、27号(通巻268号)、2017、pp.73-96

新原道信、“うごきの比較学”にむけて 惑星社会の“臨場・臨床の智”への社会学的探求(1)、『中央大学社会科学研究所年報』、査読無、21号、2017、pp.67-93

新原道信、“うごきの比較学”から見た国境地域 惑星社会の“臨場・臨床の智”への社会学的探求(2)、『中央大学社会科学研究所年報』、査読無、22号、2018、pp.15-31

新原道信、コミュニティでのフィールドワーク/デイリーワークの意味 惑星社会の“臨場・臨床の智”への社会学的探求(3)、『中央大学社会科学研究所年報』、査読無、23号、2019(9月刊行予定)、pp.23-59

(学会発表)(計8件)

野宮大志郎、Dancing with the Devil: Between Hiroshima and Fukushima in Post-war Japan, 41st All India Sociological Conference, 招待講演、2015

野宮大志郎、Globalizing Mentality?: Two Anti-Nuclear Campaigns in Japan, 6<sup>th</sup> Multi-disciplinary Science Forums, 招待講演、2015

天田城介、境界に立つ研究者たちの研究倫理をめぐる葛藤と構造的ジレンマ、日本生命倫理学会、招待講演、2015

新原道信、鈴木鉄忠、“Terza Missione dell'Università e responsabilità della ricerca: Esperienze di formazione e ricerca con le comunità”, FOIST, 招待講演、2016

新原道信、鈴木鉄忠、“Coesione sociale e promozione della cittadinanza attiva. Ricerche a confronto nel contesto giapponese e in quello sardo ed europeo”, INTHUM, 招待講演、2016

新原道信、鈴木鉄忠、“Ricerca sociale e impegno comunitario”, FOIST, 招待講演、2017

新原道信、鈴木鉄忠、Disuguaglianze, senso civico, partecipazione. Come lavorare insieme. Le nostre esperienze e quelle giapponesi a confronto”, INTHUM, 招待講演、2017

新原道信、鈴木鉄忠、"Comparazioni e narrazioni tra isole giapponesi, pelagie e sarde, di ritorno da Lampedusa", INTHUM、招待講演、2018

(図書)(計8件)

天田城介 他、青弓社、大震災の生存学、2015、224p

新原道信 他、東京大学出版会、震災と市民2 支援とケア:こころ自律と平安をめざして、2015、256p

野宮大志郎、新原道信 他、新泉社、サミット・プロテスト グローバル化時代の社会運動、2016、326p

新原道信 他、有斐閣、現代人の国際社会学・入門 トランスナショナリズムという視点、2016、332p

新原道信、野宮大志郎、鈴木鉄忠、中村寛、中里佳苗、中央大学出版部、うごきの場に居合わせる 公営団地におけるリフレクシヴな調査研究、2016、571p

新原道信 他、東信堂、再帰的 = 反省社会学の地平、2017年、214p

新原道信、天田城介、鈴木鉄忠、阪口毅、大谷晃、鈴木将平、中里佳苗、中央大学出版部、“臨場・臨床の智”の工房 国境島嶼と都市公営団地のコミュニティ研究、2019、491p

新原道信、天田城介、鈴木鉄忠、阪口毅 他、中央大学出版部、地球社会の複合的諸問題への応答の試み、2019年10月刊行予定

(産業財産権)

○出願状況(計0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年:  
国内外の別:

○取得状況(計0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
取得年:  
国内外の別:

(その他)

ホームページ等

イタリアの共同研究者メルレルとヴァルジウ等が主導する研究組織である FOIST/INTHUM では、本調査研究も含めた日本(その他、ブラジル、カナダ、インドなど)との共同研究の展開が紹介されている。FOIST <http://www.foistlab.eu/> INTHUM <http://www.inthum.eu/>

## 6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名:野宮大志郎

ローマ字氏名:NOMIYA, daishiro

所属研究機関名:中央大学

部局名:文学部

職名:教授

研究者番号(8桁):20256085

研究分担者氏名:天田城介

ローマ字氏名:AMADA, josuke

所属研究機関名:中央大学

部局名:文学部

職名:教授

研究者番号(8桁):70328988

(2)研究協力者

研究協力者氏名:アルベルト・メルレル

ローマ字氏名:(MERLER, alberto)

研究協力者氏名:アンドレア・ヴァルジウ

ローマ字氏名:(VARGIU, andrea)

研究協力者氏名:フランチェスコ・ラッザリ

ローマ字氏名:(LAZZARI, francesco)

研究協力者氏名:アンナ・メルッチ

ローマ字氏名:(MELUCCI, anna)

研究協力者氏名:田淵六郎

ローマ字氏名:(TABUCHI, rokuro)

研究協力者氏名:中村寛

ローマ字氏名:(NAKAMURA, yutaka)

研究協力者氏名:鈴木鉄忠

ローマ字氏名:(SUZUKI, tetsutada)

研究協力者氏名:阪口毅

ローマ字氏名:(SAKAGUCHI, takeshi)

研究協力者氏名:中里佳苗

ローマ字氏名:(NAKASATO, Kanae)

研究協力者氏名:大谷晃

ローマ字氏名:(OTANI, akira)

研究協力者氏名:鈴木将平

ローマ字氏名:(SUZUKI, shohei)

研究協力者氏名:友澤悠季

ローマ字氏名:(TOMOZAWA, yuki)

研究協力者氏名:栗原美紀

ローマ字氏名:(KURIHARA, miki)

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。